手綱染餘作春駒

13
2378
244

遠3
2378
244

墨春亭梅麿作
香蝶樓國貞画

手綱染餘作春駒

上之巻

天保十巳 癸 新版

紅英堂

近松著の小室節。丹波與作が達引の意女房を合せ夫婦。その一對を父母うらくやみと産出せし子持稿手綱染との題なれども筆の鞭さえ廻らぬ虎言まご逐ひ[illegible]の馬士唄なれば竹が雀は口真似も品のくぶうぞ傀儡女。関の小万を重ね丼が振も替さぬ駅路の金鈴。音もよし折も能作が虎侍忠孝をうら御釵も。てうど己手が入間の智礼姫を本妻。簒の目を。誰が振出しの双六屋が環會あへせをたら路鳥坂諸夏方寸がゐくみ算恋ちを習ふいろは上衛内中を引裂就鳥の爪掻き狂言。鬼平の蜂蔵がの鬼討や健ゐ顔母へ見まろぶ精一平が勇び春駒三吉が。乗ゐ乗ゐぞ懸聲。[illegible]の冊史の新版物を評判を偏に願ふて。

天保十巳 癸 初春

春廼屋梅麿記

驛路の金鈴
鷲塚鳴太夫
鷺坂沙門が妻 藤浪

入間郡領の息女 調姫
手綱丸の宝剣
舞子の後見 逸平

屋
小松
女房
傀儡師
妹
妻餘作

由留木の御内
沼之介
楢野餘作
假ふ馬追丹波与作
伊呂波

四季の花盛踊
関のふまんい鬼ひさの色とあくむや

実ハ
就鳥塚
八平次

馬方
蜂蔵

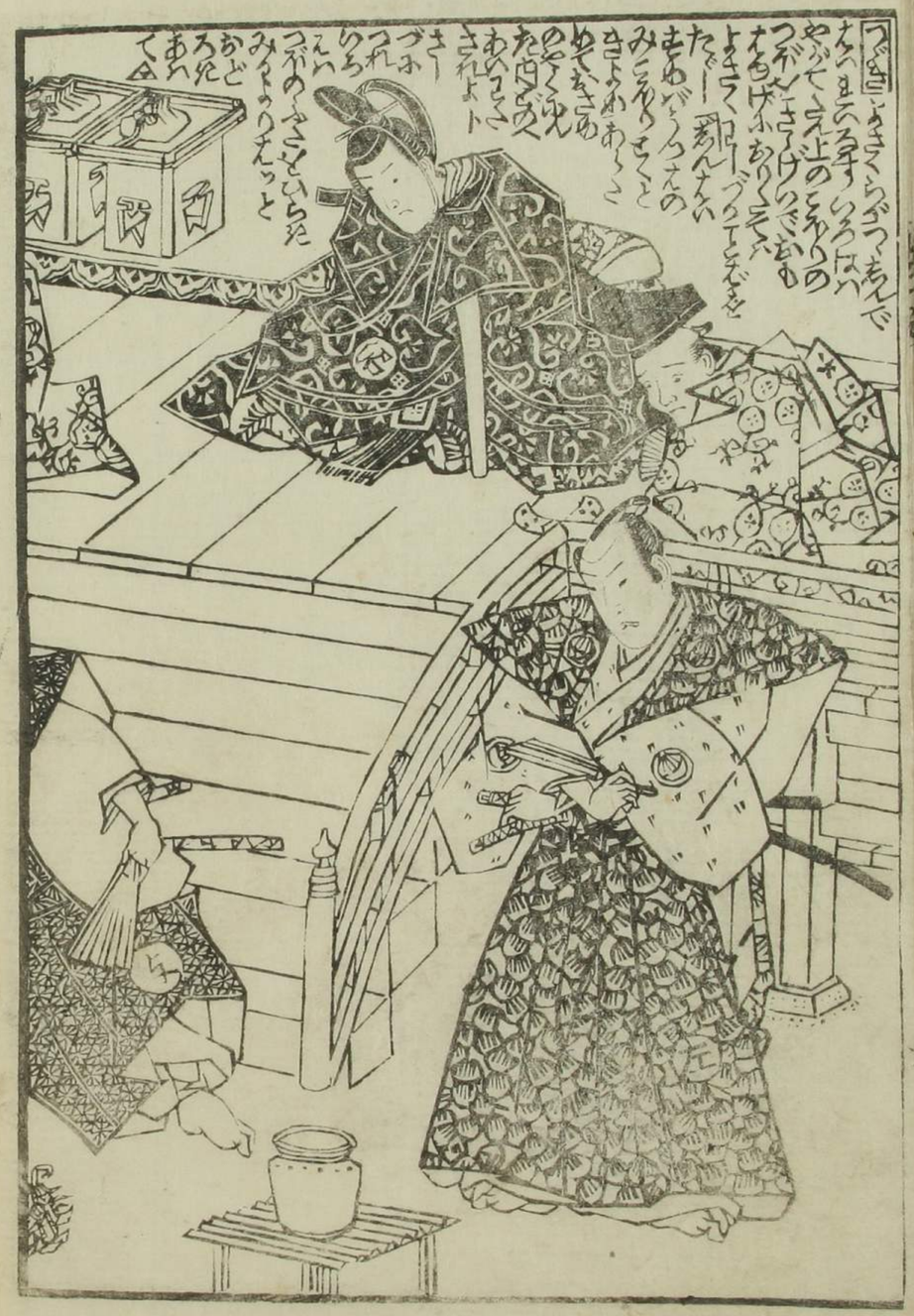
そをごのりまげ立ものいとけなふ
ぬのてふ色のむらさきいろ
あぢ羽笠あたい踊よ
笠をそろへてそれくふまん
とぢりぢせふまんてんと
ぢりぢもそろくそろく
川のをがわ船ッ
おがさそりやかが笠よ
ちくちくふくろく花笠
笠のくもとのれ不ねり
笠ハみりがふうてさてく
ぢりこれさてふぢざる」

此踊くこ室永七年印本
ねこの落葉古来中興
踊歌第五十八番ふ
ひえくり

舞子
春駒五吉
実ハ
餘作が娘阿三

執子
関の屋小力
後ハ餘作妻
重の井

左内
路鳥坂左内



江戸元祖 松月英堂

おもてぐろのまげねの二十日過合

一貝 ぼうず用 代十六朔

日本橋通り戸物町 義太夫本家 内田勝蔵 ［印］ 江戸屋茂右衛門製

板元萬吉

あづるの拵めをさく
のたるごま　中のまき
国貞画
梅まろさく　つくし堂

江戸元祖

松月英堂

日本橋通戸物町 伽羅香類所 三河屋茂吉謹製

一貫代十六銭

一所婦人方古鉄瓶をふくみ入れて古茶を入れ方四五日過ぎ或は三日四日もたつつけば毎日鉄瓶の気にぬれ新疾不起冬の日は寒さつよくぶるの元なりいひのせうしき儀とうきうちもぐろと古付き孤ひるもぐろと古付き時の古茶古用に一度二十日ばかり煎じてとりくるみ出の茶の利動なれば四季の一つもなれりとかしの儀うそ世ぐくるみはれた色の上古用の元作付てもり粉末茶上

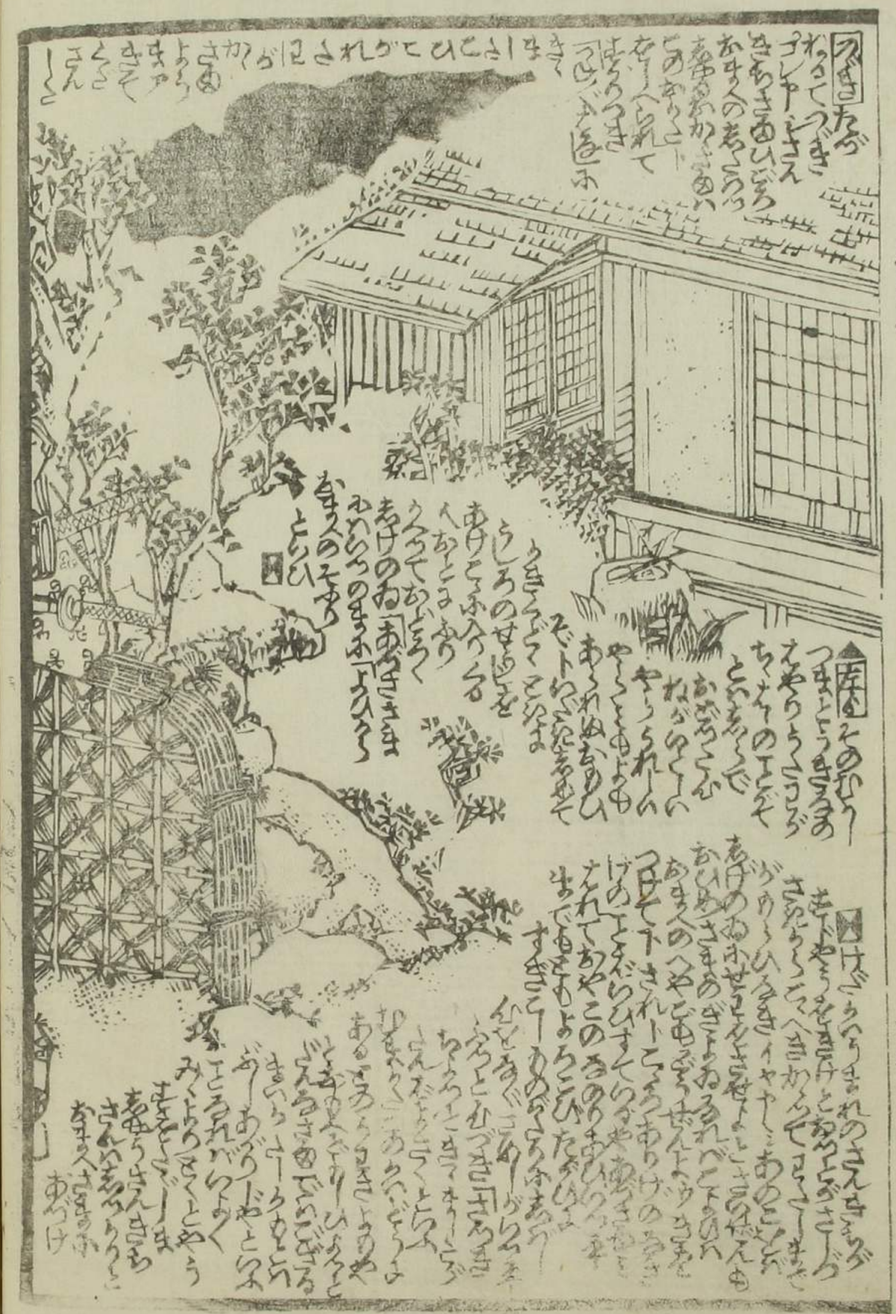
古用ひゆ包紙に表しく和紙をこしいさらの法めんどうなるの方法

古うひ入れ茶せつ法ふくんの茶すゆしじ古出ひ入れてもそれるの方

半一ゆるぐ生成すくむ一度は移つ水用てそ切ゆ

墨春亭梅麿作
香蝶樓國貞画
下

たゞ清太郎
はるゞ海
梅齋作
国貞画



あんなけのまさかな
松野たゆとるの

香蝶楼國貞画

墨春亭梅麿作

天保十己亥新版稗史類目録

合鏡蔦　珊亭種彦作
香蝶楼國貞画　全四冊

大晦日曙草紙　山東庵京山作
初編　全八冊
香蝶楼國貞画

手綱染餘作春駒　墨春亭梅麿作
全六冊
香蝶楼國貞画

弘法流忠臣蔵　墨川亭雪麿作
四十七字伊呂波六編　四冊
香蝶楼國貞画

繁ヶ夜話語園蔭　梅春島作
五雲亭貞秀画　全四冊

犬塚縁起八藤士傳　亭丸作
五風亭貞虎画　全四冊

其移香梅由兵衛　亭丸作
五風亭貞虎画　全四冊

名仮宅比六歌仙　亭丸作
五雲亭貞秀画　全冊

義艶仙女香
黒沖美女香　取次所　江戸中橋南傳馬町一丁目東側
地本問屋　蔦屋吉蔵版